

提

言



守るべきものを継承しながら 挑戦しつづける組織へ



清水市代

公益社団法人 日本将棋連盟 会長

しみず・いちよ／1969年東京都生まれ。女流棋士七段。1985年に女流棋士としてデビュー。1988年19歳で初タイトルとなる女流名人を獲得、1996年27歳で前人未到の女流タイトル四冠制覇を成し遂げる。女流タイトル獲得は歴代2位の通算43期を誇る。2017年に日本将棋連盟常務理事に就任、2025年から現職。

2024年に創立100周年を迎えた日本将棋連盟。正会員の9割以上を男性が占める組織で昨年6月、女性の会長が誕生しました。会長就任時に清水会長がみずからの使命として掲げたのが「継承と挑戦」でした。歴史ある組織による伝統や文化を守るための挑戦から、JAの組織運営のヒントを探ります。

■「継承と挑戦」に込めたメッセージ

私が日本将棋連盟の会長という大役を仰せつかったとき、まず心に浮かんだのは「継承と挑戦」という言葉でした。

将棋は日本古来の伝統文化であり、礼に始まり礼に終わる「棋道」です。先達は何百年もかけて紡いできた様式美、勝負師としての魂、目に見えない礼節など、これらは私たちが使命感を持って、後世へ伝えていかなければならないものです。

一方で、時代は刻一刻と変化しています。「こうあらねばならぬ」という固定観念に縛られて縮こまってしまっては、将棋界の発展は望めません。今までにない

ものを取り入れ、当たり前だと思っていたことを見直していく。この「挑戦」こそが、伝統を未来へつなぐカギになると信じています。初の女性会長が選ばれたこと自体、男性社会といわれてきた将棋連盟にとって大きな、そして新たな挑戦であると考えています。



棋道としての将棋の伝統美の継承に力を入れる
(写真提供/日本将棋連盟)

■ 新たなファンづくりで広がる可能性

今、将棋界にはかつてない変化が起きています。以前は「指して楽しむ」ファンが主流でしたが、現在は「観る将」と呼ばれる、見て楽しむファンが驚くほど増えています。対局の解説会だけでなく、トークショーや前夜祭に伺うと、会場の9割が女性ということもあり、その熱気には日々驚かされます。

ファンの入り口も多様化しました。「まず推しの棋士がいて、その棋士が命を削って向き合っている将棋に触れてみたい」と初心者教室を訪れる人がたくさんいらっしゃいます。こうした変化に応えるためには、受け身ではなく、こちらから発信し提案していく姿勢が必要だと感じています。

一昨年、新しくなった将棋会館には、カフェを併設したショップ「棋の音(きのね)」をオープンしました。棋士の顔がプリントされたカップチーノを目当てに、ふらっと立ち寄ってくださる方もいます。将棋の盤と駒が登場しないイベントでも人が集まる。そうした今までは考えられなかった新しい形が、将棋の可能性をどこまでも広げてくれているのです。



2024年に創立100周年事業の一環として新しい将棋会館が完成した。カフェ「棋の音」が併設されている



■ 人と人をつなぐ価値を大切にしたい

私がめざしているのは、将棋をもっと身近なものにすること。日常の中で自然と将棋の話題が出るような、そんな文化にしていきたい。

さらに将棋は、人と人をつなぐ力を持っています。「棋は対話なり」という言葉がありますが、対局中は言葉を交わさなくても盤上では深い対話が行われています。終局後の感想戦では、その一局を共に作りあげた者同士が、敬意を持って振り返りをする。この文化は、将棋の本質的な価値を象徴していると感じています。

AIの存在も、大きな転機となりました。一時は棋士の価値が揺らぐのではないかという不安もありましたが、結果的には将棋の技術を大きく進化させ、人間の価値を改めて浮き彫りにしました。ミスや逆転、感情の揺れ動きといった、人間ならではの要素に多くの方が魅力を感じてくれています。AIと対立するのではなく、共に高め合う存在として向き合えたことは、将棋界にとって大きな意味があったと感じています。



2017年に棋士・加藤一二三九段の引退時には、清水会長(当時常務理事)が花束贈呈をした。名勝負名局の数々を残した棋士への感謝と労いの気持ちを込めた

■ 「0から1」にする女性参画の重要性

私が理事に立候補したのは2017年、将棋界が激震の中にあっただころでした。将棋ソフトの不正使用疑惑があっ、運営面でも揺らいでいた時期。こういときだからこそ、自分の経験や人脈を生かして恩返しができないか、その一心で誰にも相談せず飛び込みました。

当時は執行権を持つ女性理事が初めてということもあり、運営も経営もゼロからのスタートでした。ですが、私という「窓口」が一つできたことで、今まで運営側が知り得なかった女流棋士の感覚や現場の課題を、当たり前のように共有できるようになりました。物事は「0から1」に変わる瞬間がたいへんですが、その重要性を改めて感じています。

常務理事として力を入れたのは、女流棋戦の数を増やすことです。棋士が実力を出せる舞台がたくさん整うことで、活性化につながります。結果的に、女流棋戦を2つ増やすことができたのは自信につながりました。

現在の私たちの職場環境は、女性職員も多く明るく活気があります。所属長も半分くらいが女性です。一方で、今の若い世代には責任ある立場を避ける傾向も見受けられます。私は若者と接するとき手取り足取り教えるよりも、まずは「よ

く見て、よく聞いて、よく伝える」ことを大切にしています。相手の言葉を理解して聞き、自分の思いが相手に届いて初めて「対話」が成立するからです。

また、父から教わったのは「目的」と「立場」と「らしさ」というこの3つをつねに考えなさいということ。相手と1対1で向き合ったときも、その話をする目的と自分の立場、そして自分らしい言葉や態度を考えながら接するようにしています。



扇子などに書いている揮毫は「一步氷心」。清らかな気持ちで、将棋界の次の一手を繰り出す
(写真提供/日本将棋連盟)

■ 計画どおりいかないことに学びがある

忙しい日々の合間に家庭菜園を楽しむことが、私の心の癒やしです。父が趣味で始めたものですが、土づくりから始める野菜作りは奥が深いものです。

種をまいても芽が出ないこともあれば、台風でトウモロコシが全滅してしまうこともあります。まさに「読み筋通りにいかない」驚きの連続。だからこそ、収穫できたときの達成感は格別です。計画どおりにいかないことに、おもしろさがあり学びがあります。

座右の銘である「一步氷心」も、その延長にあります。一步一步を大切にしながら、つねに澄んだ心で物事を見つめる。経験を重ねるほどに先入観にとらわれがちですが、どんな場面でも初心の気持ちで向き合いたいという思いを込めています。

将棋も人生も、一手一手の積み重ねです。だからこそ、目の前の一局に誠実に向き合いながら、継承すべきものを守り、新しい挑戦を恐れずに歩んでいきたいと思っています。